

4971 **メック**

前田 和夫 (マエダ カズオ)

メック株式会社社長

主力の CZ シリーズが高密度電子基板向けでシェア拡大

◆当第 1 四半期決算の概要

平成 27 年 3 月期第 1 四半期の連結業績として、売上高は 21 億 55 百万円(前年同期比 4 億 18 百万円増)、為替による影響は 1 億 25 百万円増となっている。内訳は、薬品 20 億 4 百万円(同 3 億 85 百万円増)、機械 18 百万円(同 12 百万円減)、資材 1 億 25 百万円(同 42 百万円増)であった。売上総利益は 14 億 59 百万円(同 3 億 77 百万円増)、販売数量増や高付加価値薬品売上の増加により売上総利益率は 67.7%(同 5.4 ポイント増)に上昇した。

販売費及び一般管理費は 9 億 14 百万円(前年同期比 35 百万円増)、為替による影響は 36 百万円増であった。営業利益は 5 億 45 百万円(同 3 億 42 百万円増)、為替による影響は 20 百万円増となっている。為替差損が 15 百万円(前年同期は為替差益 38 百万円)発生し、経常利益は 5 億 48 百万円(前年同期比 2 億 90 百万円増)となった。

法人税等 2 億 21 百万円(前年同期比 1 億 31 百万円増)は、台湾の税制改正に伴い増加しているが、当第 1 四半期に増税分 78 百万円を一括計上したため、第 2 四半期以降に大きく増加することはないと考えている。これらの結果、四半期純利益は 3 億 27 百万円(同 1 億 62 百万円増)となった。

連結貸借対照表の状況として、現金及び預金 37 億 89 百万円(前期末比 2 億 81 百万円減)は、税金、賞与や仕入債務の支払によって減少した。有形固定資産の土地 28 億 11 百万円(同 21 百万円減)は、為替差によって減少している。投資有価証券 4 億 36 百万円(同 30 百万円増)は、株式の時価上昇によって増加し、退職給付に係る資産 1 億 92 百万円は、主に退職給付金会計基準変更に伴い増加した。

流動負債については、支払手形及び買掛金 6 億 72 百万円(前年同期比 2 億 18 百万円減)が支払によって減少した。未払金 2 億 67 百万円(同 88 百万円減)は、日本での設備関係未払金を主として減少している。未払法人税等は 1 億 83 百万円(同 1 億 67 百万円減)に減少した。

固定負債では、繰延税金負債 5 億 19 百万円(前年同期比 99 百万円増)がおもに台湾の税制改正による留保金に対する税効果の増加 78 百万円によって増えている。

キャッシュフローの状況として、営業活動によるキャッシュフローはマイナス 37 百万円(前年同期は 2 億 38 百万円)、投資活動によるキャッシュフローはマイナス 2 億 3 百万円(同マイナス 1 億 83 百万円)、財務活動によるキャッシュフローはマイナス 98 百万円(同マイナス 1 億 17 百万円)となった。これらの結果、現金及び現金同等物の四半期末残高は 26 億 2 百万円(前年同期比 8 億 66 百万円増)となっている。

◆海外売上高比率が拡大

当第 1 四半期業績のポイントとして、薬品売上高は 20 億 4 百万円(前年同期比 23.8%増)、売上高に占める割合は 93.0%(同 0.2 ポイント減)であった。

海外売上高比率は 51.2%(前年同期比 3.4 ポイント増)に増加した。なお、当社薬品海外使用分の国内代理店

販売を海外売上高に加算した場合の比率は 68.0%(同 6.0 ポイント増)に大きく増加している。

CZ の売上高は 10 億 65 百万円(前年同期は 8 億 39 百万円)、薬品売上高に占める割合は 53.2%(前年同期比 1.4 ポイント増)となった。

四半期ごとの売上推移をみると、当第 1 四半期の実績は連結・単体とも前期第 4 四半期を上回り、第 3 四半期には満たない水準であった。営業利益も同様の傾向を示しており、まずまずの進捗と考えている。四半期純利益(連結)は、前期第 4 四半期にマイナス 8 百万円となったが、当第 4 四半期は 3 億 27 百万円に回復している。

品種別四半期売上高推移として、当第 1 四半期は薬品 20 億 4 百万円(前期第 3 四半期実績は 20 億 12 百万円)、機械 18 百万円(同 98 百万円)、資材 1 億 25 百万円(同 1 億 32 百万円)、その他 7 百万円(同 10 百万円)と、前期もつとも業績を伸ばした第 3 四半期とほぼ同様の水準となっている。

薬品別四半期売上高推移をみると、当第 1 四半期は銅表面処理剤 18 億 54 百万円(前期第 3 四半期は 18 億 50 百万円)、防錆剤 32 百万円(同 42 百万円)、フラックス剤 57 百万円(同 56 百万円)、剥離剤 54 百万円(同 59 百万円)と、銅表面処理剤が大部分を占める。剥離剤はエッチングを中心に増やしていきたいと考えており、フラックス剤は現状維持、防錆剤は減少している。銅表面処理剤は順調に推移している。

別区分での薬品別四半期売上高推移では、当第 1 四半期は、密着向上剤 12 億 20 百万円(前期第 3 四半期は 11 億 42 百万円)、エッチング剤 6 億 88 百万円(同 7 億 67 百万円)、その他表面処理剤 94 百万円(同 1 億 2 百万円)となっている。エッチング剤は近年増加傾向にあるが、当第 1 四半期はとくに密着向上剤が増加した。

CZ シリーズの四半期売上高推移として、CZ-8100 は 2 億 24 百万円と微減しているのに対し、主力の CZ-8101 は 5 億 17 百万円(前期第 3 四半期は 4 億 57 百万円)に伸長した。とくにパッケージ基板や高密度基板を用途としたものが大きく増加し、スマートフォンやタブレット PC、データセンターやサーバー向けの好調がおもな要因となっている。今後も、高密度化といった時代の要請にこたえながら収益を伸ばしていく考えである。

地域セグメント別の四半期売上高と海外売上高比率の推移として、当第 1 四半期は、日本 11 億 46 百万円(前四半期は 10 億 16 百万円)、アジア 8 億 10 百万円(同 8 億 35 百万円)、欧州 1 億 98 百万円(同 1 億 37 百万円)となった。欧州は自動車関連を中心に伸びをみせている。ドイツには独立系の部品メーカーが多いことから、今後さらに波及していくことが予想される。

平成 27 年 3 月期の通期業績予想については、売上高 88 億円(前期比 10.0%増)、営業利益 17 億 50 百万円(同 23.1%増)、経常利益 17 億 50 百万円(同 12.8%増)、当期純利益 11 億円(同 18.9%増)に修正した。第 2 四半期(累計)の業績予想は、売上高 45 億円(前年同期比 19.6%増)、営業利益 10 億円(同 66.7%増)、経常利益 10 億円(同 47.7%増)、四半期純利益 6 億 50 百万円(同 44.4%増)を計画している。為替の想定レートは、据え置きとした。下期には正月や旧正月があり、日本から原材料を取り込む必要も生じることから、第 1 四半期よりも低い粗利率を想定している。

◆今後の事業展開について

当社の製品展開については、難しい分野ではまずニッチなところで採用してもらい、そこでの高評価をもとに汎用化することで数量を拡大し、収益を上げていくというモデルを目指している。

タブレット PC、スマートフォンは、今後しばらく重要な分野である。最近、伸びに陰りがみられると聞かすが、生産技術が成熟していく過程で当社製品へのニーズは高まっている。ハイエンド向けに利用されるだけでなく、ある程度高品質のものを低コストで生産したい場合にも、当社製品は威力を発揮する。メーカーにとって、薬品にかかるコスト負担は他の材料に比べて小さく、生産プロセスにおける歩止まりやスループットの向上といったメリットは大きい。立ち上がりからのタイムラグを経て、当社としてはタブレット PC やスマートフォン向けが好調な時期に入ったといえる。

クラウドコンピューティングのニーズが高まる中で、サーバーやデータセンター関連も大きく伸びている。自動車

は少しずつ増加しており、5 年後以降に大きく開花することを期待している。テレビでは、すでにデファクトスタンダードとなっている部分もあり、他の分野に水平展開することも考えている。

当社のコア技術として、物理密着技術(CZ シリーズ、V ボンド)や化学密着技術(フラットボンディングシリーズ)を含む密着向上技術、微細配線形成技術、表面処理技術が挙げられる。

CZ 処理の使用は、スマートフォンやタブレット PC の PKG 基板のビルドアップ前処理に拡大してきており、1 回処理から 3 回処理に増えている。これも当社の CZ が伸びる要因となっている。データセンターや基地局用サーバー PKG も拡大している。

テレビに関しては、ブラジル、中国、ロシアでは今後デジタルテレビ化が進むことから、ディスプレイ向け薬品販売を拡大していけるものと考えている。

金属表面処理技術「アマルファ」は、自動車をおもな市場としているが、安全性や規格のクリアにもう少し時間がかかる状況である。早期の量産化に向けて、民生分野の取り組みも進めているところである。電子基板製造関連分野では、ディスプレイ分野を 1 つの柱として、その他樹脂金属接合関連分野などに拡大していく計画である。

今後の成長イメージとして、スマートフォン、タブレット PC 基板用とディスプレイ用薬品の売上を伸ばし、その後はアマルファを含めた新技術関連の売上も伸ばしていきたいと考えている。

これからも成長し続けるために、グローバル展開の強化、新製品の開発力強化、トータルな品質保証体制の強化に取り組んでいく。

◆ 質 疑 応 答 ◆

タッチパネルの動向について、また CZ の用途別の状況を伺いたい。

タッチパネルは、急増ということはなく少しずつ伸びている状況である。これから第 2 四半期、第 3 四半期は増加し、第 4 四半期には減少するイメージを持っている。今後の技術動向を見ながら、フォーカスを定めて開発していきたいと考えている。CZ は、8 割程度がパッケージ基板(PC、サーバー、データセンター、スマートフォン、タブレット PC、自動車、テレビ、デジカメなど)、残り 2 割が一般基板(おもにスマートフォン、自動車)を用途としており、どちらも同程度の伸び率で推移している。

(平成 26 年 8 月 4 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見ることができます。

http://www.mec-co.com/ir/k_setsumei/